No.139　令和8年　夏

葵 AOI

徳川美術館
THE TOKUGAWA ART MUSEUM

展覧会紹介
P2~3

夏季特別展
武芸 サムライ・アスリート

千代田之御表 流鏑馬上覧(部分)楊洲周延画
明治30年(1897)　徳川美術館蔵

将軍の前で、馬を走らせながら馬上で弓を射って的に当てる流鏑馬が行われている様子が描かれています。将軍が武芸の腕前を観覧する「上覧」は、武士にとっては自身や家の名誉にもなりました。

ご案内　P4
所蔵品図録　『徳川美術館所蔵　武器・武具』
『令和8年度 徳川茶会』

エッセイ　P5
尾張徳川家と柳生新陰流兵法　柳生耕一平厳信氏
柳生新陰流兵法第22世宗家 尾張柳生家第16代当主

研究ノート　P6
刀剣と異素材

インタビュー　P7~8
文化財と人をつなぐ新たな挑戦

夏季特別展

武芸　サムライ・アスリート

7月25日(土)～9月27日(日)

[前期]7月25日(土)～8月25日(火)

[後期]8月26日(水)～9月27日(日)

本館展示室/名古屋市蓬左文庫　展示室1・2

金土俵空穂　桃山～江戸時代　16～17世紀　朝岡平兵衛重政所持

江戸時代は長きにわたる平和な時代が続きましたが、武士たちはいつ起こるともわからない戦いのために、常日頃より鍛錬を怠りませんでした。江戸幕府が慶長20年（1615）に、大名以下全国の武士たちに対して発令した「武家諸法度」の第一条の冒頭に「文武弓馬の道、専ら相嗜むべき事」とあるように、武士たる者は文武に励むべきこと、とりわけ弓馬の道に代表される武芸を身につけるように定めました。

尾張徳川家の初代義直は、関ヶ原合戦のあった慶長５年（1600）に誕生しました。大坂冬の陣・夏の陣にも参加し、成瀬正成や平岩親吉など戦国時代に活躍した武将たちが家臣として従ったことから、義直自身が武芸に関心を寄せた逸話を多くの書籍に見ることができます。そして二代光友以降の尾張徳川家歴代も、自身が稽古に励み、また家臣たちの鍛錬にも関心を示しました。家臣たちの鍛錬の成果は「上覧」の場で披露され、優れた技量の持ち主には褒美が与えられ、個人や家の名誉として後世に伝えられました。

武士たちにとって弓矢を用いる弓術と馬を乗りこなす馬術は、戦いの場で最低限必要とされ、多くの武芸のなかでも筆頭格に挙げられました。初代義直は、関ヶ原の合戦で活躍した朝岡重政をはじめ、弓の名人を積極的に登用しました。重政が所持した「金土俵空穂」は矢を納める道具で、重政の武勇を称えて空穂の蓋に家康が「天下一人」と墨書したと伝えられています。また馬術も重要視されました。馬は乗用のため調教を必要とし、毎日のように騎馬の訓練が行われました。尾張徳川家には、家康遺品である「黒塗桐紋鞍・鐙」

黒塗桐紋鞍・鐙　桃山～江戸時代16～17世紀　徳川家康所用

大太刀 銘 永則（以下 37 文字略） 室町時代 14世紀
朱塗叩塗大太刀拵（大太刀 銘 永則 附属） 柳生利厳（尾張柳生家初代）所持

をはじめとする馬具が多く遺されており、歴代当主の乗馬に使用されたと考えられます。

刀を用いる剣術も江戸時代以降重要視されました。剣術は、家康に仕えて将軍家の剣術指南役を務めた柳生宗矩の甥・利厳が義直に仕えて一家を成し、尾張徳川家に柳生新陰流を伝えました。「大太刀 銘 永則」は、尾張徳川家が柳生新陰流の宗家を継承した際に柳生家から兵法目録とともに献呈を受けた刀剣で、尾張徳川家の代替わりの際にはその都度柳生家に返されるのが例でしたが、14代慶勝の代に尾張徳川家に留めおかれることとなりました。

軍学は、各種武器や武具を用いる「総合武芸」にあたります。軍学には甲冑や各種武器、軍旗や陣所の構え、勝利を占う占星術などが含まれました。ここでは戦国武将の間で受け継がれた「赤備え」に注目し、尾張徳川家でも赤備えを意識した例として、初代義直が作らせた「朱塗啄木糸威具足」を紹介します。

西洋発祥の武器で、日本にもたらされて広まった火縄銃（鉄炮）は、戦国時代に新た加わった武器です。義直には砲術家の稲富祐直（一夢）が仕えたことから尾張徳川家では稲富流が行われ、稲富流の火縄銃が準備されました。

鷹狩は大勢の勢子を動員する点で合戦の模擬訓練に近く、弓矢と鉄炮を併用して獲物を捕らえること、鷹が捕らえた獲物を人間が走り寄って捕らえる身体鍛錬を伴う点で武芸同様の身体運動といえます。鷹狩を特に好んだのが家康で、最晩年に至るまで鷹狩を行いました。尾張徳川家には、工芸の粋を集めた数多くの鷹狩道具が伝えられています。

今回の夏季特別展「武芸 サムライ・アスリート」では、尾張徳川家伝来品を中心に、大名家・尾張徳川家で行われた武芸を紹介します。この夏、この名古屋の地で、アジア地域最大の国際総合スポーツ大会である第20回アジア競技大会が開催され多くの衆目が集まります。今回の展覧会を通して、江戸時代の武士たちが磨き上げた心・技・体の技術である武芸について、多くの人々の理解が深まることを願っております。

（学芸員 並木 昌史）

ご案内

30年ぶりの復活！
所蔵品図録『徳川美術館所蔵　武器・武具』

平成8年（1996）に発行し、その後長らく欠品となっていた『大名の備え―甲冑と武器―』（徳川美術館蔵品抄10）。この夏の特別展「武芸　サムライ・アスリート」開催にあわせて、30年ぶりにリニューアルした所蔵品図録『徳川美術館所蔵　武器・武具』を刊行いたします。

見どころ

- 令和7年(2025)発行の『徳川美術館 新名品選』に続く新たな所蔵品図録。
- 大名道具の真髄といえる尾張徳川家伝来の武器・武具に焦点を当てた充実の内容。
- 掲載作品は新たに収録した鷹狩道具を含む約50点を追加した、全323点。
- 新規撮影の図版を多数掲載し、より美しく刷新。

『徳川美術館所蔵　武器・武具』
販売価格：3,000円
発売日：令和8年7月24日
※メンバーシップ会員特典対象図録。
　プラチナ・ゴールド会員1冊、法人会員2冊を贈呈予定。
※詳細は変更となる場合があります。

令和8年度 徳川茶会

開催日・担当流派

10月11日（日）	表千家	吉田生風会
10月12日（月・祝）	表千家	名古屋長生会
10月17日（土）	裏千家	淡交会愛知第二支部
10月18日（日）	裏千家	淡交会愛知第三支部
10月24日（土）	大日本茶道学会	
11月 1日（日）	裏千家	淡交会愛知第一支部
11月 3日（火・祝）	裏千家	桃夭会

全7日間

会　　費	25,000円（税込） 入館料・濃茶・薄茶・点心を含む
開催時間	午前 9時30分から最終席終了まで
受付時間	午前 9時15分～午後1時
点 心 席	午前10時45分～午後2時
場　　所	徳川美術館庭園内 餘芳軒・山ノ茶屋・宝善亭

茶券購入方法
一般販売　8月7日（金）午前10時開始
電話またはオンラインにて受付 ※会員先行申込あり

※詳しくは当館ホームページより
　ご確認ください。

エッセイ

尾張徳川家と柳生新陰流兵法

柳生新陰流兵法第 22 世宗家
尾張柳生家第 16 代当主

柳生耕一平厳信（やぎゅうこういちたいらのとしのぶ）

1952年　東京都生まれ。
1970年　柳生新陰流兵法第21世宗家、
　　第15代尾張柳生家当主柳生延春厳道（実父従兄弟）に入門。
2002年　尾張柳生家の養子となる。
2006年　第22世宗家を継承。
2007年　第16代当主となり、現在は国内外7つの柳生会にて約120名の会員に対し直接指導する。
　　日本古武道振興会　会長・常任理事。日本古武道協会常任理事。

今から約460年前、戦国時代の末期、大和国柳生の里に住んでいた柳生石舟斎宗厳（せきしゅうさいむねとし）は、新陰流兵法の流祖である上泉伊勢守信綱（かみいずみ）から、一国一人の印可状（いんかじょう）を授けられ柳生新陰流兵法の祖となりました。

更に遡ること235年、石舟斎の7代前の柳生播磨守永珍（ながよし）は、「元弘の変」で、手勢270騎を連れ柳生の里北方約一里にある笠置山の後醍醐天皇方陣に参戦し、侍大将足助次郎重範（しげのり）の配下で鎌倉幕府軍と戦いました。

そのご縁で、石舟斎の孫で3世宗家を継承した利厳（としとし）は、足助重範の子孫、尾張藩附家老の犬山城城主成瀬正成（まさなり）の紹介によって、駿府に隠居していた徳川家康公に面会し、後に初代尾張藩主となられた九男、義直公の兵法師範に任ぜられました。利厳は居を名古屋へ移し、現在の錦通に面した下園公園の西側に道場付きの屋敷を構えました。屋敷は第2次世界大戦で焼失し、現在は同公園に尾張柳生家屋敷跡の史跡名勝標札が立っています。

利厳は元和元（1615）年から兵法師範として義直公に弊流を教授し、元和6（1620）年に、元和偃武（げんなえんぶ）の新しい時代に即応した兵法を「始終不捨書（しじゅうふしゃしょ）」に著述し、4世宗家の印可として義直公に献上しました。戦国の世から平和な世となり甲冑剣術から素肌剣術へと術理を進化させ、武士が兵法を学ぶ目的を「身を修める」こととしてその序文に明示しました。

5世宗家柳生連也厳包（れんやとしかね）は、同年の2代藩主6世宗家光友公、家老山澄英龍（ひでたつ）と弊流の稽古に励みました。光友公と連也は、初心者向け兵法の形を工夫し、現在も初心者がその形を最初に学ぶこととなっています。

17代藩主18世宗家徳川慶勝公の時、明治維新を迎えました。江戸時代には藩主と藩主就任前に病没された方を含む7名の尾張徳川家の方々と尾張柳生家14名の当主が宗家として弊流を受け継ぎました。

祖父20世厳長（としなが）から今日まで口伝書他を毎月解説する「講道」を会員に行っています。私の学生時代に父21世延春は、東京の養神館道場にて講道を行っており、19代当主徳川義親様がしばしば参加されました。目白のご自宅に延春と会員をお招き頂きお雛様を拝見したことが思い出されます。

振り返ってみますと、尾張徳川家と弊流の繋がりは長く、弊流は尾張藩の庇護のもと有縁無縁の人々に支えられ、今日を迎えています。現在も名古屋を本拠とし、各地の柳生会会員と共に、石舟斎が残した「柳生家憲（かけん）」の一節「昨日の我に今日は勝つべし」を心に刻み、日本の伝統文化の振興と継承に日々精進しております。

研究ノート

刀剣と異素材

学芸員 安藤 香織

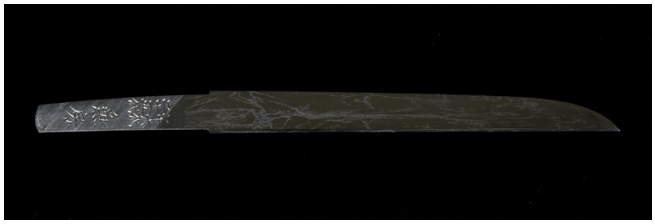
今秋、佐野美術館（静岡県三島市）にて、同館と徳川美術館との共同企画展「名刀のいろは」が開催されます。刀剣の多様な魅力をお伝えするため、両館の担当者が協力して内容を練っている中、当初の予定以上に掘り下げることとなったテーマが「素材」です。基本的に、刀剣の素材は砂鉄を原料とする鋼（はがね）です。鋼は鉄に微量の炭素を加えた金属で、炭素量により硬軟の差が生まれるため、刀工はその微妙な違いを見極めて鋼を使い分け、「折れず、曲がらず、よく切れる」刀剣を作ります。この古くからの素材・製法に対し、「南蛮鉄（なんばんてつ）」「餅鉄（べいてつ）」「耐錆鋼（たんせいこう）（ステンレス鋼）」など通常とは異なる素材を用いたことを銘文に刻む珍しい作品も見かけます。なぜ砂鉄以外の素材をわざわざ使用したのだろうという疑問が、このテーマの発端でした。

異素材の代表「南蛮鉄」は、主に江戸時代に輸入された外国産の鉄です。実は、南蛮鉄は国産の鋼に比べて脆（もろ）く、刀剣製作に適するとは考え難いにもかかわらず、徳川家康に仕えた刀工・越前康継（やすつぐ）による作例が複数確認されています。このことから南蛮鉄は、権力者のみが入手できた貴重な素材として作刀に使用されたと指摘されています。

「餅鉄」は、岩手県など東北地方の河川や山林で採取される鉄鉱石（てっこうせき）（磁鉄鉱（じてっこう）の塊）です。刀剣の作例は、盛岡藩において餅鉄を原料とした近代製鉄が開始された安政年間（1855～60）以降、東北地方の刀工を中心に多数確認されています。藩の奨励のもと、西洋式の新しい製鉄法を誇示するため、銘文に示したと考えられます。

20世紀に実用化された「ステンレス鋼」は鉄にクロムを加えた合金です。軍刀に多用されただけでなく、昭和8年（1933）の現在の上皇陛下御誕生に際しては、関の刀工・藤原兼永作のステンレス刀「高砂御太刀」が名古屋市から献上されています。このことから考えると、当時、ステンレス鋼は耐食性を期待されただけでなく、祝儀に相応しい最先端の素材と捉えられていたのでしょう。以上のような現存作例からすると、異素材による刀剣製作は、刀工にとって新しい素材への挑戦でもあり、栄誉でもあったことがわかります。

異素材への挑戦は現代にも続いています。令和2年（2020）、関の刀工・藤原兼房氏によって「鉄隕石」の刀剣「天鉄刀（てんてつとう）」（岐阜かかみがはら航空宇宙博物館蔵）が、千葉工業大学が主導する古代の作刀技術や素材に関する研究の一環として製作されました。隕石を用いた作刀の困難さや、素材が刀剣の仕上がりに及ぼす影響についてなど、詳しくは展覧会でご紹介します。



短刀　銘 二十五代二十六代兼房／天鉄刀Ⅱ空宙博
岐阜かかみがはら航空宇宙博物館蔵

展覧会情報

佐野美術館創立60周年・三島市制85周年記念
「さのび と とくび　名刀のいろは」

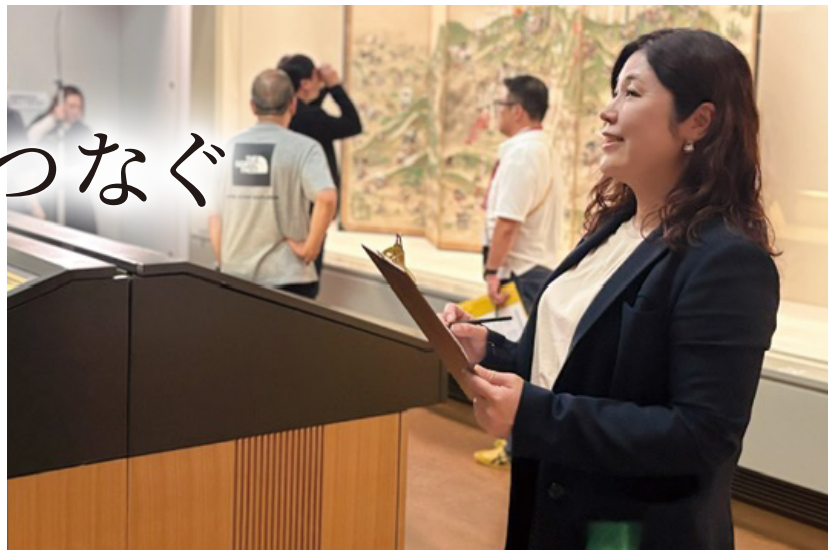
名刀のいろは
さのび とくび
Tokubi Sanobi

会場：佐野美術館
会期：令和8年（2026）9月5日（土）～10月18日（日）
※徳川美術館では令和9年春開催予定。

インタビュー

文化財と人をつなぐ新たな挑戦

広報・営業担当
吉川 由紀



文化財との出会いをつくる

昨年、開館90周年を迎えた徳川美術館。美術館と聞くと学芸員を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、その運営を支える職種は多岐に渡る。その1つが、展覧会や収蔵品の魅力を広く発信し、人と美術館をつなぐ広報の仕事である。その役割を長く担ってきたのが、吉川由紀さんだ。

刀剣ブームを後押しした情報発信や美術館業界初となるコミックマーケット出展など、数々の挑戦を重ねてきた。

広報の仕事は、雑誌やウェブメディアへの対応、取材調整、SNS発信など多岐にわたる。吉川さんが最も大切にしているのは「徳川美術館の名前を知ってもらうこと」だ。

徳川美術館は豊富な所蔵品と長い歴史を持つ一方、一般の観光客にはまだ十分に知られているとは言えない。だからこそ、来館のきっかけをつくることが広報の使命だと考えている。

また「誰でもいつでも来てほしい」という思いも発信し続けてきた。広報になったばかりの頃、「知識のない人が美術館へ行くのは失礼だ」という声を耳にし、衝撃を受けたという。それ以来、美術館をより身近に感じてもらうことを意識している。

伝統に新しい風を吹き込む

吉川さんの広報活動を語るうえで欠かせないのが刀剣ブームである。

まだ「美術館」×「刀剣」×「女性」という組み合わせが認識されていなかった頃、吉川さんは「美術館に刀剣を見に行くことがブームになる」と題したプレスリリースを発信した。これが多くのメディアの関心を呼び、取材が相次いだ。やがて刀剣鑑賞は新たな文化的トレンドとして広まり、「刀剣」と「美術館」を結びつける新たな鑑賞文化が広がっていった。しかし本人は、「ブームに乗ったというより、お客様を観察していた」と振り返る。

夏季特別展
「時をかける名刀」(2025)の
開館を待つ来館者の列

「外からは刀剣好きの広報に見えていたと思いますが、実際には、お客様が何に惹かれ、何を求めているのかを見ていました。大切だったのは、ブームを一過性のものにせず、美術館そのものへの興味につなげることでした。」

また、業界で初めてコミックマーケットへ出展したことも、大きな挑戦の一つだった。当初は館内から慎重な意見があったが、「まずは徳川美術館の名前を知ってもらわなければ始まらない」という思いから実現に向けて動いた。結果として、それまで美術館と接点のなかった層に徳川美術館を知ってもらうきっかけとなり、新たな来館者層を広げる転機となった。

文化財への思いの原点

そんな行動力の原点は、中学３年生の頃にさかのぼる。子どもの頃から絵を描くことが好きだった吉川さんは、美術の教科書で目にしたボッティチェリ《春》の修復前後の写真に衝撃を受けた。「描く人ではなく、文化財を守る人になりたい。」その思いから、日本画修復師を志した。

サンドロ・ボッティチェリ《春》(右上)　図版出典：『世界美術大辞典』第５巻（小学館）

そしてその翌月には１人で京都へ向かい、電話帳を片手に修復工房を訪ね歩いた。後に就職先となる工房との出会いも、この時だった。大学卒業後は京都で修復の道に進み、国宝や重要文化財の修復に携わった。住み込み時代、工房には全国の美術館から展覧会ポスターが届いていた。徳川美術館のポスターが届くたび、工房のご主人は「東海つながりや」と言って表に貼り出し、「いつか徳川さんの仕事をさせてもらえるような、立派な職人になりなはれ」と声を掛けてくれたという。十数年後、吉川さんは徳川美術館の採用面接に臨む。そこで当時の副館長から掛けられたのは、「ああ、あのときの」という思いがけない一言だった。後に知ったことだが、工房のご主人と当時の副館長は交流があり、その縁が思わぬ形で徳川美術館との出会いにつながっていたのである。

修復の道で培った経験は、後に広報として文化財の魅力を伝える仕事にも生かされていった。立場は変わっても、文化財を守り、未来へ伝えたいという思いは今も変わらない。そして今年4月、吉川さんは10年以上携わった広報業務を離れ、新たに営業担当となった。企業や地域との関係づくりを通じて、これまでとは異なる立場から文化財と人をつなぐ挑戦を続けている。

PROFILE

吉川 由紀（よしかわ ゆき）

1978 年福岡県生まれ、岐阜県育ち。
表具師として働いた後、いくつかの美術館を経て、
2013年４月より徳川美術館にて勤務。
趣味は旅行と園芸。

発行年月日：令和8年7月1日　編集発行：徳川美術館　〒461−0023 名古屋市東区徳川町1017
TEL（052）935−6262　https://www.tokugawa-art-museum.jp/

公益財団法人　徳川黎明会

活動支援基金寄附者名簿

個　人

— 敬称略 —

ア	赤堀康彦		金 リンダ リ		手代木絵夢	ミ	宮島宏子
	秋田節子		清野久美子	ト	徳川喜壽		宮田励司
	浅井みちよ		清野英彦		冨田和枝	ム	村井俊哉
	朝岡多麿美	コ	小林春子	ナ	長尾茂行		村上賢瑞
	麻生由香		小宮山敏和		長澤大悟	モ	持留宗一郎
	阿部隆夫		近藤昭彦		長澤弘宣	ヤ	八神　基
	雨宮秀樹	サ	齋藤恵美		中田英雄		柳澤由希
	有賀和子		坂本達彦		南雲和江		山岡さおり
イ	飯岡正毅		櫻庭茂大	ニ	新美達也		山﨑久登
	井口正俊		佐々木剛志		西尾千歳		山本英二
	石原嗣治		佐藤孝之		西　光三	ヨ	吉川正子
	石山秀和		澤　貴弘		西田佳子	ワ	和田義弘
	伊東與有三	シ	柴田耕志		西村敏子		
	岩下哲典		清水恵五	ハ	橋本暢子		
ウ	上野秀治		白根孝胤		服部はるみ		
	内田裕美		新﨑 鈞	ヒ	平田米男		
オ	大石浩哉		新﨑美至子		平塚泰三		
	大島真理夫	ス	鈴木要一郎		広瀬千明		
	大友一雄	ソ	染木知夫	フ	深井雅海		
	岡田健児	タ	髙木俊輔		深谷比呂美		
	奥川忠洋		多賀屋福子		福島佐千男		
カ	笠井 朗		滝　正		伏屋重晴		
	加藤衛拡		竹内美智代	ホ	堀井邦彦		
キ	岸　拓也	チ	千葉晃泰	マ	前田種男		
	貴布根楯雄	ツ	辻　智美		松尾美惠子		

（令和8年6月10日現在）

法 人

(株)オリエンタル　イベントクリエーターズ

(社)茶道裏千家淡交会　愛知第二支部

名古屋徳川ラインオンズクラブ

宗教法人　髙岳院

一般社団法人　坂文種報徳会

合同会社　むらやま

株式会社　名豊本社

株式会社　山本油店

（令和8年6月10日現在）

活動支援基金のお願い

寄附の用途･･･　徳川美術館および徳川林政史研究所の作品購入、収蔵品に関する修理･研究調査･教員普及および環境等の整備補充に活用させていただきます。

寄 附 金 額･･･　個人　一口一万円～
法人　一口十万円～

ご支援方法･･･　下記、①または②のいずれかの方法でご支援いただけます。

① 右記QRコードをスマートフォン等のカメラで読み取り、
必要事項ご記入の上、お振込みください。

【支払方法】クレジット･コンビニ･銀行振込みより選択いただけます。

② 所定の振込用紙で郵便局または銀行からお振込み頂けます。
振込用紙の送付をご希望の方は当館寄附係まで御連絡ください。
【徳川美術館　寄附係：052-935-6262】